



四神考：前漢、後漢期の資料を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004588

四神考―前漢、後漢期の資料を中心として

大形 徹

はじめに

四神の観念は中国文化圏において広く知られている。四神が青龍・白虎・朱雀・玄武の四靈獸を表すことは前漢あたりから始まり、後漢以降、ほぼ定着していくようだ。その後、都市計画や風水思想の中など、さまざまな方面で重要な役割をはたすこととなる。

仰韶文化の西水坡遺跡（紀元前四五〇年頃）から、墓主の両脇に蚌の目殻によって象られた龍と虎が発掘された。後世の例から類推すれば虎は惡鬼（惡靈）から墓主の遺骸を守り、龍は墓主の魂を天界へと運ぶものではないかと思われる。また遼寧省の遺跡の墓より全長一九、七米の龍形の堆石が発見されたという報告があり、龍の起源は紀元前六千年ごろまで遡りそうである。これらの龍虎が四神の淵源だとすれば、それは相当古いといえる。

後世、中国ではさまざまな宗教が生まれる。細かな差異はあるが、その中心理論は遺骸を守ることと魂が昇天することに集約されるのではない。そうだとすればその観念の原形はすでに仰韶文化の龍虎に現れていることとなる。

小論ではその四神観念が、生まれ、形づくられ、さらに変化発展していく前漢・後漢期の資料を中心として論じたい。

一、遺跡にみえる龍虎

阜新査海の龍

「中国文物報」に遼寧省の発掘報告がみえる。阜新査海の新石器時代早期の遺跡から石を並べた龍が見つかったという。

在遺址の中心区発現了位于房址和墓葬之間長達一九、七米的龍形堆石、其頭部、腹部、尾部清晰可辨、昂首游身、這是迄今為

止国内発現の最早的龍形図案、是中華民族龍崇拜形成的重要来源之一、這一發現為研究八〇〇〇年前人類的生產生活情況及原始文明的形成提供了珍貴資料。（「遼寧去年田野考古成績

頭著」〔特約記者、吳炎亮〕

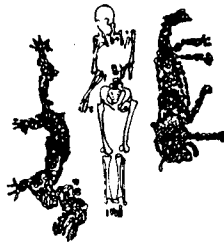
詳細な発掘報告はまだない。また写真や図も発表されていない。これがもし八千年前の龍だとすれば興味深い。また墓葬の地との関係も面白い。昂首游身とされるが、龍がすでに空を飛ぶものとされていたかどうかも興味をひく問題である。

仰韶、西水坡遺跡の龍虎

仰韶、西水坡遺跡に関しては

「河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」^③

・「一九八八年河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」に紹介されている。「文物」に紹介される西水坡遺址四五号墓の蚌塑龍虎図では墓主の遺体を挟み龍虎とされる動物が形づくられている。その周りに殉葬と思われる人物が三名横たえられる。この虎は墓主をその背後におき、墓主を守護しているようにみえる。説明によれば、「虎目圓睜」、「張口露齒」と記されている。目を見張り、牙をむくのは、虎が威嚇している様子であろう。



西水坡遺跡の龍虎

虎

後世、『風俗通』等には虎が悪鬼を食らうことが記される。悪鬼（罔兩・魍魎・鬼魅）は死体を食らうとされ、虎は遺体を食いあらす鬼を追いはらう役割を果たしていたようだ。悪鬼は脳や肝臓を食べるとされる。これは悪鬼が遺体に入り込むことと関連するだろう。悪霊も含めて靈魂は何らかの容器に入り込もうとする。生者の肉体、死者の遺体、頭蓋骨^⑥、内臓^⑦などは、靈魂の容器といえる。

『唐・新修本草』^⑧は「虎頭もて枕を作らば惡魔を辟く。戸上に置かば鬼を辟く」とする。ここでは虎の頭骨をもちいて惡鬼を追いはらう。枕にするのは夢中に出游した魂が悪鬼（惡靈）に捕えられ、ことを防ぐためである。虎の頭蓋骨によりついた虎の靈魂によって惡靈を防ぐのだろう。戸上に虎の頭骨をかけるのも虎の靈魂によって惡靈が戸内に侵入することを防いでいるのだろう。なお虎は藥物として實際に服用されている。これは体内に侵入して病をひきおこす惡鬼を追いはらうためである。^⑨

龍

一方、龍は天界に魂を運ぶものであろう。『楚辭』に「靑虬兮驂白螭、登崑崙兮食玉英。与天地兮同寿。与日月兮同光」^⑩とみえる。龍に運ばれ崑崙山に着いた死者の魂は玉英を食べ、天地や日月と同じだけの寿命を得るといふ。『列仙伝』黄帝にも「有龍垂胡髯下、

迎帝乃昇天」と黄帝を迎えて昇天した話が記される。この話は『史記』孝武本紀で公孫卿が説いたものだが、そこでも「有龍垂胡髯、下迎黄帝、黄帝上騎」とされている。

長沙戰国期楚墓出土の帛画にも龍に乗る人の姿が描かれる。^⑬この湾曲した龍は後世の龍舟の図によく似ており、この龍も龍舟と呼ばれることがある。^⑭李白の詩に「孤帆遠影碧空尽、唯見長江天際流」とみえ、杜甫の詩にも「差池上舟楫、窈窕入雲漢」とある。イメー

ジの上で水平線と天はつながっており、舟ののって天に行きつけたのである。

馬王堆の昇仙図においても、墓主人は龍に乗って昇仙しているように思われる。^⑮また羽人が龍にまたがっている図は画像右や肖形印などに数多くみえる。^⑯

二、鏡背にみえる四神

ここでは鏡背の紋様や銘文にみえる四神について概観する。青龍・白虎・朱雀・玄武の四つからなる典型的な四神はそれほど多くない。四神の一部が欠けたり、また四神以外の禽獣が含まれていたりとか差万別である。その画像資料の豊富さは群をぬく。ここではその一つ一つを紹介する余裕はない。とくに漢以後のものに関しては年代の比較的確実なものだけしかとりあげられなかった。しかし四神の

概念が確定し、またそれが発展していく際、鏡の図像が重要な役割を果たしていくことは確かである。

殷の鏡

殷以前より鏡はある。^⑰殷は青銅器文化がさかんで祭祀に複雑怪奇な文様をほどこした。ところが鏡は簡単な幾何学文様ばかりで殷を代表する饕餮紋などの神獣にかかわる文様はない。^⑱

西周の鏡

西周には文様のない素鏡が数例あるが注目すべきは禽獣鏡である。^⑲二頭の虎が左右に配され、上部には鹿、下部には鳥が描かれる。虎は全身に渦卷文様が描かれ、牙をむき、爪をたて威嚇しているようにみえる。左の虎には舌が描かれている。

戦国楚墓の鎮墓獸^⑳は鹿の角をつけ、牙をむき、舌を出し、立ち上がり、前足の爪をたてて、墓主の遺体をねらう悪鬼を威嚇して、追いつく様子を示す。これには体に渦卷文様が描かれるものもある。^㉑鏡と鎮墓獸とともに河南のものだが、鎮墓獸は、鏡背にえがかれた動物たちを合体させたものではないだろうか。



禽獸鏡 河南省

虎には悪鬼を追いかう意味がこめられる。この鏡にもそういった意味があるのだろう。また翼の生えた鳥が魂を天へと運ぶ話は多い。⁽²⁴⁾『列仙伝』では、蕭史は鳳に乗り、王子喬は白鶴に乗って昇仙した。鏡の鳥にもそのような意味があるのかもしれない。

戦国の禽獣鏡

戦国時代には禽獣鏡が数多い。四獣鏡・三龍鏡・四龍鏡・三鳳鏡・四鳳鏡など、同一種の動物が三ないし四あらわれるものが多い。四獣鏡には虎とされるものがあり、また怪獣とされるが熊に似るとされるものもある。⁽²⁵⁾これらのなかには亀・蛇あるいはその組み合わせによる玄武の姿は見いだせない。異種の動物が組み合わせられる例はある。⁽²⁶⁾けれども四神の体裁を備えたものはまだない。

四神鏡

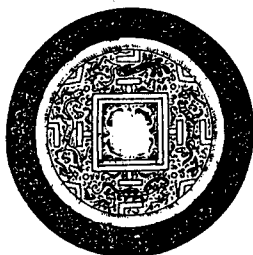
前漢時期になり四神をかたどった鏡背が現われてくる。けれども最初から典型的な四神が現われてくるわけではない。禽獣が4つである場合。主たる禽獣は4つで、それに他の禽獣が付加される場合。同様の大きさの禽獣が8つ現われる場合等、さまざまな形式がある。ここでは四神、あるいはその一部が登場する鏡背を考察する。その際、年代の比較的確定されているものもちいる。⁽²⁷⁾

前漢

361	名称	禽獣	時期	地点
265	四乳四鳥鏡	朱雀・鳥・朱雀・鳥(雁?)	前漢	湖南長沙
269	四乳四獸鏡	龍・虎・熊(方相?)・虎	前漢後期	広東広州
268	四乳禽獣鏡	虎・朱雀・虎・朱雀	前漢後期	広東広州
317	禽獣簡化博	龍・朱雀・虎・朱雀 青龍・朱雀・白虎・蟾蜍	前漢晚期	河南洛陽
			前漢晚期	河南洛陽

前漢期と確実にわかるものは多くない。禽獣は4つが多いが典型的な四神とされるものではなく、4つのうち2つが虎や朱雀であったりする。未央宮の瓦当では四神が確定しているが前漢時期の鏡背では必ずしも確定していないようだ。

興味深いのは玄武である。この例では玄武は全く現れていない。玄武が鏡の図版として登場するのは、この表には出していないが、前漢のものとされる「方格規矩四神文鏡」⁽²⁸⁾、前漢後期から新のものと推定されている「金之青四神博局鏡」⁽²⁹⁾あたりが最も早いと思われる。文献では『礼記』曲礼、『淮南子』天文訓にすでに見え、鏡に



方格規矩四神文鏡

おける玄武の登場はそれほど早くない。

蟾蜍は秦の瓦当や馬王堆の帛画の月中に見える。蟾蜍は兎とともに表わされるものがある。この場合、兎が月を満ちさせ、蟾蜍は月を食べ、欠けさせるとみなされたように思われる。

熊は『南陽漢代画像磚』に多出する。方相氏であろう。方相氏は『続漢書』『礼儀志』大儺に熊の皮を着る神としてあらわされている。また戦国時代の楚の姓が「熊」であることも関連するかもしれない。大儺における方相氏の役割は悪霊を追ひ払うことにある。

未央宮の瓦当

漢の未央宮のものとして四神の瓦当が出土している。未央宮は漢の高祖七年に建てられた。『史記』高祖本紀には「蕭丞相宮作未央宮、立東闕、北闕、前殿、武庫太倉」とある。この時点で南闕、西闕があったのかは不明で、また瓦当があったかどうかかわからない。しかし『三輔黄図』卷三「未央宮、殿屋」には「蒼龍、白虎、朱雀、玄武、天之四靈、以正四方」とあり、四靈（四神）がしるされている。



未央宮の瓦当

前漢中期に淮南王劉安が編纂したとされる『淮南子』天文訓には、五行思想によって四神が分類されている。それを表にすると、

方角	五行	帝	佐	執	治	制	神	獸	音	日
東	木	太皞	句芒	規	春		歲星	蒼龍	角	甲乙
南	火	炎帝	朱明	衡	夏		熒惑	朱鳥	徵	丙丁
中央	土	黃帝	后土	繩		四方	鎮星	黃龍	宮	戊己
西	金	少昊	蓐收	矩	秋		太白	白虎	商	庚辛
北	水	顓頊	玄冥	權	冬		辰星	玄武	羽	壬癸

となる。五星に関する記述である。『淮南子』は全てを五行という整理筆筭にふりわけようとする。四つしかない季節（春夏秋冬）を五つにすることは無理があるが、中央を特別視して四方を制とした。また歳星（木星）・熒惑（火星）・鎮星（土星）・太白（金星）・辰星（水星）の五星が「神（五神）」とされ、蒼龍・朱鳥・白虎・玄武に黄龍をくわえたものが「獸（五獸）」とされている。中央としての黄龍

黄龍の記述はそれほど多くない。「黄帝得土德、黄龍地螾見（『史記』封禪書）」、「十五年、黄龍見成紀（『漢書』文帝紀）」・「黄龍負圖授黄帝（『河圖』）」とみえる程度である。ただし『宋書』符瑞志には黄龍の項目があり、比較的多く現れる。

黄龍の「黄」は、黄帝の黄であり、黄土（大地）の黄であり、黄河の黄である。「黄」は皇帝の「皇」に通じ、黄土を支配する皇帝をイメージさせる。「黄」は当然、中心であり、四方を四獣がとりまく形となる。

しかし、『淮南子』に黄龍・蒼龍と龍が重複してあらわれるのはいかにもバランスを欠く。図像化する際も彩色しなければ蒼龍と黄龍の識別は困難である。そういった理由で黄龍を中心とする『淮南子』の理論は後世の図像上にはほとんど現れていないのたろう。

麒麟

中央に麒麟が位置することもある。³³ 杜預の『春秋左氏伝』の注に「麟鳳五靈、王者之嘉瑞也」とあり、疏では「麟・鳳与亀・龍・白虎五者、神靈鳥獸、王者之嘉瑞也」とある。ここでは確かに五靈という語がみえる。麒麟は王者の出現を示すものとされ、王者を象徴するともみなされる。けれども、ここではたんに瑞祥として羅列されているだけで、四神にかまれて麒麟が中央に位置することもないようにおもわれる。

『礼記』の「礼運」には「何謂四靈、麟・鳳・亀・龍謂之四靈」とあり、虎のかわりに麒麟が入る。四乳禽獸鏡にも「青龍・麒麟・白虎・朱雀」というものがある。これは玄武のかわりに麒麟が入る。いずれも特殊な例で普遍的なものではない。

中央の空白

鏡や墓室、瓦当などでは四神は四方に描かれ、中央は空白となっていることが多い。この空白の位置に鏡ならば所有者が、墓ならば墓主が、宮殿ならば皇帝が位置することとなる。四神はその空白部分も合わせて考えると五行思想に組み込まれている。³⁴

漢の肖形印に四霊印がある。『伏魔

藏印』には中央が空白となったものや、中央に「趙多」という所有者の姓名を

刻したものがある。いずれも四方に四神が刻されている。四霊私印とよばれているが四神によって私印の所有者を守護するのだろうか。印の正方形はこのように分割すれば四神がバランスよく中央を囲む。なお玄武を欠くものや朱雀・玄武を欠くものもある。³⁵ 朱雀・玄武を欠くものは龍虎に挟まれた形で仰韶の遺跡の龍虎を想起させる。また厭勝銭にも四霊が刻されているものがある。³⁶ 当然、中央が空白となっている。

行軍の旌旗

『礼記』「曲礼上」の行軍の旗も同様の考え方にもとづく。「行前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎、招搖在上」とある。いうまでも



趙多私印

なく中央に天子がいる。鄭玄の注釈は「以此四獸為軍陳象天也」。招搖は北斗七星で星座としての四神の名残かもしれない。天を象っているのであろう。なお『礼記』の疏では、前に朱雀を用いるのは「軍前宜捷」という理由。玄武は亀で「亀有甲能禦」とされ、その甲羅が守備に役立つという。また龍虎は「威猛如龍虎」とされる。何胤は「如鳥之翔、如蛇之毒、龍騰虎奮、無能敵（『礼記』疏所引）」という。ここでは玄武は蛇に重点がおかれ、毒蛇の毒が敵を制するともみる。いずれにしても四神は中央を守護するものとされる。

鏡 紐

鏡は中心に紐がある。紐には「四葉紋紐座」とよばれるものがあり、葉の形だとされている。ところがこれは画像石墓の藻井の蓮華にもよく似ている。また四神の磚の中央の蓮華にも似ている。この場合天の星座の中心とされる。蓮華紋は瓦当の中ではもともと普遍的なものとなっていく。これらを合わせて考えると鏡の紐にも天の中央と理解してよいものがあると思われる。

星座としての四神

天文訓には星座としての四神がみえる。⁽⁴²⁾「太陰在寅、朱鳥在卯、



四神の磚 1～2 C

句陳在子、玄武在戌、白虎在西、蒼龍在辰」。これは前述のものは考え方が異なっている。四神は東西南北ではなく、十二支の方角と関連づけられる。そのため「朱鳥在卯」と、朱鳥は東となり南ではない。

別に東方青龍七星宿・西方白虎七星宿・南方朱雀七星宿・北方玄武七星宿という言い方もある。

鏡はほとんどが円形で、日月にたとえられることがある。⁽⁴³⁾「天円地方」というが、やはり天と結びつけられることが多いのだろう。次に新のものを考察する。

309	七乳羽人禽 獸鏡	青龍・朱雀・鳥(朱雀?)・白虎・独角獸(羊?)・蟾蜍・羽人	前漢晚期 墓より出土
279	金之青四神 博局鏡	「青龍・羽人・獸」・鳥・朱雀・鳥・「獸(豹?)」・白虎・獸・「蟾蜍・玄武・龜」	前漢晚期 新
313	始建国二年 禽獸簡化博局鏡	「兔・西王母」・「朱雀・獸?」・「獸?・仙人?」・「辛羽人・独角獸・羽人」	新、始建国二年(紀元10年)
351	始建国天鳳 局鏡	瑞獸・青龍・羽人・朱雀・禽	新、始建国

272	二年四神博局鏡	鳥・白虎・玄武・蟾蜍	国大鳳二 年(紀元15)	
265	善銅四神博局鏡	青龍・禽鳥・朱雀・独角羊 白虎・独角羊・玄武・不明	新	
274	新興四神博局鏡	青龍・羽人・朱雀・鳥・白虎 ・大角獸・龜・蛇	新	
277	善銅四神博局鏡	青龍・羽人・朱雀・獸・白虎 ・禽鳥・独角獸・玄武(無蛇、 尾は長い)	新	
296	四神博局鏡	青龍・[朱雀・朱雀]・白虎・ 玄武	新	河南洛陽
301	尚方禽獸博局鏡	[鳥・鳥]・[鳥・鳥]・[鳥・鳥] ・[鳥・鳥]	新	湖北鄂城
303	禽獸博局鏡	[西王母・羽人]・瑞獸? 瑞獸?・[白虎?・羊?]・ [朱雀・羽人]・[西王母登場]	新	江蘇揚州 王莽時期
306	多圈帶禽獸博局鏡	内区、[獸・龜?・白虎・雲 氣・朱雀・朱雀]・[獸・羽人・ 獸]・外区、[二鳥・朱雀・	新	墓出土 河南洛陽

337	善銅六乳禽獸鏡	[白虎・獸]・[獸・青龍?]・ [熊?・朱雀]	新	湖南
354	七乳四神鏡	青龍・羽人・玄武・怪熊(羽 あり)・白虎・朱雀・金鳥。 辺縁に白虎・朱雀・熊・熊・ 牛(兕?)・熊・朱雀・羽人・ 猪・猪	新	河南洛陽
265	四神博局鏡	[青龍?・青龍?]・[朱雀? ・朱雀?]・[白虎・独角獸] ・[蟾蜍?・羽人・玄武]	新および そのやや 後の時期	河南洛陽 墓
283	四神博局鏡	[青龍・瑞獸]・[白虎・瑞獸 ?]・[玄武・瑞獸]・[羽人・ 蛇]	新・後漢 初年	江蘇揚州

すでに四神がみえるが青龍・白虎・朱雀・玄武の典型的な四神のみのものは、ここでは一つもない。禽獸は4以上のことが多い。もっとも多いものは8(2×4)である。ほかに5・7・10・12とあり、内区・外区とわかれているもの、辺縁に記されているものなど、さ

まざまなヴァリエーションがある。

四神以外の禽獸・神仙としては、独角獸・独角羊・大角獸・羊・牛（兕？）・蟾蜍・熊？・怪熊（羽あり）・獸・獸（豹？）・瑞獸・兎・龜・蛇・禽鳥・金鳥（金雞？）・鳥・西王母・羽人・仙人？・猪などがあげられる。必ずしも決まったパターンはない。

後漢の鏡

後漢時期になると鏡の量が圧倒的に多くなり、神獸鏡関係のものも数多い。ここでも比較的年代の確かなものを中心に考察する。

283	尚方四神博局鏡	「青龍・小鳥・小鳥・鳳凰・朱雀・小鳥・小鳥・山羊」・「白虎・小鳥・小鳥・独角獸」・玄武・蟾蜍？・小鳥・羽人	後漢早期墓	河南洛陽
285	四神博局鏡	「青龍・羽人」・朱雀・人首鳥身禽鳥・「白虎・怪熊」・玄武・人首鳥身獸、此外在朱雀方位、TL紋之間有一小鳥	後漢早期墓出土	湖南資興
283	福熹四神博	「羽人・青龍」・小鳥・朱	後漢早期	河南洛陽

	局鏡	雀・「蟾蜍・白虎」・蟾蜍・玄武	後漢早期	湖南資興
285	四神博局鏡	「青龍」・朱雀・「白虎」・「玄武」	後漢早期墓	湖南資興
286	七乳禽獸鏡	龍・朱雀・朱雀・蟾蜍	後漢早期	
281	四乳四神鏡	青龍・玄武・朱雀・白虎・朱雀（玄武を北におけば青龍が西、白虎が東となる）	後漢前期墓出土	広東広州
283	四乳禽獸鏡	「青龍・羽人」・雛鳥・雛鳥（ウズラ？）・「白虎・独角羊」・獸（九尾狐？）・鳥（尾が朱雀ではない）	後漢前期墓出土	広東広州
283	四乳八禽鏡	「鳥・鳥」・「鳥・鳥」・「鳥・鳥」・「鳥・鳥」（頭部に二つに分かれた冠）	後漢前期墓	広東広州
284	尚方七乳四神鏡	羽人・青龍・朱雀・羽人騎獸・鳥・独角獸・白虎・玄武？	後漢前期墓	広東広州
284	張氏七乳禽獸鏡	圈内「龍・虎・虎」内区「龍・虎・鳥・大眼怪獸・狐・双	後漢前期墓	広東韶県

370	尚方四神博局鏡	「角牛形獸・獸」[辺縁「龍・虎・鳥・魚・鳥・虎・鳥・獸・魚等」]	後漢中期	河南洛陽
		「青龍・小鳥・小鳥・小鳥・畢方」・「朱雀・小鳥・小鳥・羽人・羽人・小鳥・鹿」・「白虎・小鳥・小鳥・小鳥・小鳥」		
		「玄武・羽人撫琴(兎?)」・「兎」		
318	四鳥簡化博局鏡	鳥(朱雀?)・鳥・鳥・鳥	後漢中期	湖南資興
		墓		
332	張氏五乳禽獸鏡	青龍?・白虎・朱雀・玄武?	後漢中期	湖南長沙
		墓		
338	魯氏六乳仙人獸紋鏡	仙人・青龍・白虎・独角獸・玄武	後漢中期	湖南長沙
345	尚方七乳四神鏡	内区「四神・羽人・禽獸」	後漢中期	湖南省
348	尚方七乳四神鏡	四神及其他禽獸	後漢中期	湖南省
349	侯氏七乳禽神鏡	仙人瑞獸紋辺縁「玉兔」	後漢中期	湖南長沙
369	獸鏡	九尾狐・三足鳥・龍・熊等		
369	漆言禽獸博局鏡	「青龍・獸」・「獸・獸」・「白虎・獸」・「朱雀・獸」	後漢後期	廣東広州
376	四神禽獸簡化博局鏡	「羽人・獸」・「獸・朱雀」・「獸・人面獸」・「羽人・獸」(獸の形態不明)	後漢後期	廣東広州
379	四鳥簡化博局鏡	禽鳥(朱雀?)・禽鳥・禽鳥・禽鳥	後漢後期	広州
382	六乳禽獸鏡	内区「虎・虎」外区「4瑞獸・朱雀・羽人」	後漢晚期	廣西貴県
389	四神禽獸博局鏡	「青龍・有羽翼的長耳獸(兎)」・「朱雀・朱雀」・「白虎・独角羊」・「玄武・独角羊」	後漢時期	河南洛陽
397	善銅禽獸博局鏡	「龍・直立獸」・「朱雀・獸」・「虎・獸」・「長卷独角獸・長耳獸」	後漢墓	湖南長沙
397	呂氏五乳羽人龍虎鏡	龍・龍・熊?・虎・羽人	後漢墓	湖南長沙

五乳禽獸鏡	龍・熊・虎・羽人・獸	後漢時期	湖北鄂城
六乳禽獸鏡	龍・独角羊・獸・虎・朱雀 ・蟾蜍	後漢墓	湖南衡陽
西 陳氏六乳禽 獸鏡	内区「青龍・朱雀・玄武・ 白虎・蟾蜍・羽人」外区 「四神・鳥獸・日月」	後漢時期	河南洛陽
差 合好七乳禽 獸鏡	圈内「龍虎對峙紋」内 区「青龍・白虎・朱雀・ 双角獸与鳥・二羽人射 獵・羽人射獵・虎闘与 鳥」辺縁「大象・蛇纏繞 魚・羽人乗舟・人物闘 獸・羽人等」	後漢墓	江西南昌

四神鏡と名づけられることが多いが青龍・白虎・朱雀・玄武の四つだけのものはむしろ珍しい。禽獸の数も四つのは少なく、さまざまな変化がある。一般に時代が下るにつれ、また「乳」の数が多くなるにつれて、禽獸の総数がふえてくる。

ここでは紹介しなかったが、このあと重列式の鏡が現れてくる。これは階段上に西王母・東王父などの神仙や神獸が配置される。そ

れまでは紐を中心として求心的な構図が描かれていた。先にみたように、この中心の空白は鏡の所有者が位置する場所であった。重列式神獸鏡では、そういった意味での中心がなく、これ以降の鏡は四



新、始建国天鳳二年
四神博局鏡

神を東西南北に配当するものといえなくなる。さきに龍・虎の本来的な意味は魂の昇仙と悪霊から遺体を守ることと述べた。鏡背の禽獸はその意味合いを残しながらも、その対象は死者ではなくむしろ生者の方へと傾斜していくようにみえる。

後漢あたりの鏡であろうが銘文に、

左龍右虎除不祥、朱鳥玄武順陰陽、寿敵金石梁未央、長保二親
富貴昌、子孫備居中央、女為夫人男為卿

とみえる。ここには典型的な辟邪瑞祥の考え方がみえる。鏡の図版も銘文にあわせて四神がえがかれている。

「辟邪」は邪悪をさけることである。具体的には悪鬼・悪霊をさけることとなる。墓室の内外にある虎の像や画は死者の遺体を守護するものであった。しかし虎の図像を身につけることによって生者も悪鬼から身を守りうる。ここでは龍おび虎が「不祥を除く」と辟邪の役割を果たしている。

「瑞祥」は吉を求めるものである。ここにいう寿命の長いこと、両親が長生きすること、富貴となること、子孫がさかえること等々である。辟邪と瑞祥は切り離されるものではなく、ここにみえるように一連のものである。朱鳥（朱雀）は本来、鳳である。孔子の「鳳鳥至らず」⁽⁴⁶⁾ですでに瑞祥とされる。鳳凰の瓦当は秦にみえる。この鳳が五行思想のなかに組み込まれたものが朱雀であろう。ここでは陰陽の調和としてとらえられている。朱（赤）、南は陽であり、それに対する玄武は黒、北で陰を指す。

虎は辟邪の獣であり、ここでは白虎も同様に理解されている。けれども白虎は瑞祥とされることも多くなる。「竊虜、義獣也。白虎黒文不食生物」⁽⁴⁷⁾では、むしろ、生き物を食べない、やさしい獣とされている。これは「麟者」⁽⁴⁸⁾とされた「麒麟」と同様の意味をもつ。『白虎通』「封禪」には「白虎到り、狐、尾を九つにし、白雉降る」と瑞祥として登場する。『漢武帝内伝』で西王母が降臨する際、龍・虎・白麟・白鶴・天馬があらわれた。また西王母の紫雲の輦は九色の斑龍が曳き、さらに鸞鳥の輿があった。その様子は、四神鏡の禽獣が四神におさまりきれず次第に増加していき、重列神獣鏡へと変化していくことと軌を一にしているようにみえる。

朱 雀

朱雀は朱鳥とされることが多い。鏡や画像石の図像をみると鳳の

形に見える。鳳は孔雀に似ている⁽⁴⁹⁾。これは朱鳥が朱雀と呼ばれることに何らかの影響を与えているだろう。鳳が五行思想の流行で南方、赤（朱）と結びつけられ朱雀とされたのであろう。南方に配される理由は不明である。中国の古地図は南が上に描かれる。また天子は南面し、前進する方向が南である。天空を飛ぶ鳥は上方に描かれる方が自然のように思われる。また玄武とのバランスを考えると、やはり朱雀が上で亀が下となるのではないか。林巳奈夫は、朱鳥を鵠とみている。この場合、鵠は鷺（犬鷺）を指す。なお鏡の図像には鵠（此の場合は鷺ではなく、うずら）にみえるものがいくつかある⁽⁵⁰⁾。

玄 武

四神の中でもっとも形成が遅れるのが玄武であろう。青龍・白虎・朱雀とのバランスからいうと玄武とよばれてもよさそうだが、なぜか玄武である。玄武のみが亀と蛇という二匹の動物のあわさったものである。



鳳（朱雀）『河南新鄭画像磚』72頁

まず蛇の意味から考察したい。馬王堆の帛画では蛇が力士を襲おうとしているようにみえる。さらに棺の側面に描かれる怪獣には、蛇を捕え食らおうとしているものがある。これは先に考察した楚の鎮墓獸が口に蛇を銜えていたことを想起させる。『後漢書』方術伝、華佗には薬を服用して「立吐一蛇」という例があり、『列仙伝』玄俗にも「買薬服之、下蛇十余頭」とあり、それは「六世余殃」とされている。『有蛇』：入漢陽城景王祠中（『搜神記』卷七、臨淄大蛇）のように祠に住む蛇も多く、蛇は祖靈等の靈魂の化身とされていたようだ。それが惡靈の場合、「忽有物如蛇、突入其腦中（『搜神記』卷十七）」と体内に入り込むと考えられたのであろう。これは蛇の形状や習性に由来するものであろう。

死者に対しても蛇は惡靈で、遺体に入り込むとするのであろう。亀は甲羅に守禦の意味があり、それが玄武の武とされたらしい。⁵⁴ おそらく蛇から防禦する意味があるのだらう。

秦漢瓦当にも蛇と亀を組み合わせたものがある。亀の頭の下に蛇があり、それは亀が蛇を食べているようにみえる。また『伏魔威印』にも亀と蛇の組み合わせがあり、亀が蛇を足で押えつけている。

亀は水族であり、南（上）の朱雀とのバランスからも北（下）に置かれたのであろう。おそらく玄武の登場がもっとも遅いが、四神が一部を欠く場合は玄武が他の禽獸と入れ替わることが多い。

三、墓室にみえる四神

ここで墓室にみえる四神について概観しておきたい。漢代から六朝にかけての画像石墓に四神の絵が見られる。前漢では洛陽壁画墓（玄武は欠）、後漢では平陸壁画墓（1世紀、朱雀は欠）、四川省廬山王暉石棺（二二二年）、沂南画像石墓等がある。隋には河南省洛陽出土の石棺に線刻画があり、北宋の安守忠墓誌（二〇〇〇年）や遼の慶陵出土の聖宗哀冊篆蓋（一〇三一年）に四神図がある。⁵⁶

朝鮮では高句麗壁画墳の中の四神図が知られる。高句麗は四二七年に都を平壤に遷し六六八年まで存続した。高句麗壁画墳には四神図を主題とするもの、四神図と風俗人物画を合わせて描いたものがある。代表的な例は、江西三墓里の大墓と中墓、龍岡安性里双楹塚、同新德里星塚、湖南里四神塚、中和真坡里四神塚、輯安四神塚などである。百濟にも忠清南道公州宋山里的塼室墳、扶余陵山里的石室墳などにある。さらに時代の下った高麗では石棺の側面に四神の図を線刻することが流行したとされる。⁵⁷

日本では奈良県明日香村の高松塚古墳にみえる。南壁の朱雀図は壁面が剥落して見えないが、東壁に青龍・西壁に白虎・北壁に玄武が描かれている。

おわりに

四神のもとになった龍・虎・鳳は四神が形成される以前からさまざまなにあらわされていた。玄武だけが不明であるが亀の甲羅のもつ防禦的性格が悪霊を示す蛇の侵入をふせぐ役割を担ったのではないだろうか。この役目は神人という「人」が行っていたが、禽獣である四神の一員となるには「人」では不適当であったのだろう。いずれにしても四神は自然と形成されたものではない。五行思想の形成に伴って意図的に作りあげられたものである。四神でもっとも重要なところは四神そのものではなく、四神に囲まれた中央である。中央に位置する者を守護し、また瑞祥を齎す^{もたら}とされる。

中央に位置する者が死者である場合、死者の遺体を守護し、死後の生活に幸福を齎すのであろう。四神の原形は旧石器・新石器時代の墓にうかがわれたが、それは画像石墓などの中に整理された形で残されていく。それはまた朝鮮や日本にも伝わり影響を与えた。

鏡では禽獣の数が四神の四つに止まらず、次第にふえていった。それらも瑞祥として理解されている。そこでは必ずしも死者を対象とせず、むしろ生者の身を守護し幸福を与えるものとされる。一般に宗教は死者を対象としているようにみえるが、実際は生者を対象とする場合が多い。生者の死後の幸福を説くことが多いが、幸福の

実現を来世に求めず、現世に求めるものもまた多い。所謂、現世利益である。こういった考えが、いつごろ発生したのかは明らかにしづらいが、鏡銘の中には現世利益を願う考え方が数多くみえる。

本稿では詳しく論及できなかったが、風水思想の中でも四神は重要である。日本では平安京が造営の際、四神相応の地とされた。この際、四神はたんに東西南北をあらわす記号では無い。それぞれの禽獣のもつイメージがはたらいっている。

また日本の仏教での葬儀の際、木彫の龍や鳳が装飾的に使われている。おそらく死者の魂を昇天させる寓意があるのだろう。

四神は決して宗教の中心に位置するものではない。しかし、仏教・道教を問わず宗教のなかに深く入り込んでおり、現代にも影響を与えつづけている。また中国だけでなく日本や韓国などにもその考え方はふかく浸透している。それは四神が、宗教の根本的命題である死者と生者の守護、死者と生者の幸福に、深く関与しているからであらう。

注

(1) 拙稿「本草書にみえる虎」(『人文学論集』一四集、一九九六年)参照。

- (2) 一九九六、二六、総第四三二期。
- (3) 「文物」一九八八年、第三期。
- (4) 「考古」一九八九年、第二期、総二六七期。
- (5) 『太平御覽』卷九五四所引『風俗通』の逸文に「墓上樹栢、路頭石虎。『周礼』方相氏、入墟（墟）殿魍像（象）、魍像（象）好食亡者肝腦。人家不能常令方相立於墓側、以禁禦之、而魍像（象）畏虎与栢」とある。また『風俗通』卷八「桃梗・葦菱・画虎」は、「虎者陽物、百獸之長也。能執搏挫銳、噬食鬼魅（拾補曰、続漢志注、能擊鬻牲食魍魅者也）、今人卒得惡遇、（拾補曰、疑衍）。燒悟（拾補曰、忤同）虎皮飲之。擊（拾補曰、『御覽』繫其爪（拾補曰、『太平御覽』作其衣服）、亦能辟惡。此其驗也」につくる。
- (6) 頭蓋骨とそれに依りつく靈魂に関しては拙稿「尸解仙と古代の葬制のかかわりについて」（『中国研究集刊』辰号、大阪大学中国学会、一九三三年）参照。
- (7) 後世、五臓神など内臓に神（神魂）があるとされたが、いずれも囊状の容器といえる。中村生雄『日本の神と王権』法蔵館一九九四年、六頁にも「ぬけがら」と靈魂の關係が示される。
- (8) 唐、蘇敬等撰、顯慶二年「六五七年」。
- (9) 前掲「本草書にみえる虎」・拙稿「鬼系の病因論」（大阪府

- 立大学紀要、人文・社会科学編、第四三卷、一九九六年）参照。
- (10) 注に「虬螭、皆龍類」とある。
- (11) 屈原『楚辞』離騷、涉江。
- (12) 「長沙帛画」、文物出版社、一九七三年。
- (13) 林巳奈夫は船でなく龍だとする。
- (14) 黄鶴樓送孟浩然之広陵詩。
- (15) 白沙渡詩。
- (16) 曾布川寛『崑崙山への昇仙』、中公新書、一九八一年、参照。
- (17) 王伯敏著、北川博邦、中野遵訳『中国古代の肖形印』、東方書店、一九八五年。
- (18) 齊家文化、幾何紋鏡、「七角星紋鏡」、孔祥星『中国銅鏡図典』、文物出版社、一九九二年、一頁参照。
- (19) 前掲『中国銅鏡図典』に多圈凸弦紋鏡・葉脈紋鏡・平行線紋鏡などが紹介される。
- (20) 前掲『中国銅鏡図典』一〇〇～一〇二頁には戦国時代の饗鏡を三例紹介する。うち一例は伝世品とされる。
- (21) 河南三門峽上村嶺虢国墓地一六一二号墓出土。西周晩期から春秋早期のものと推定される。前掲『中国銅鏡図典』七頁参照。
- (22) 河南信陽長台関戦国墓、『故宮文物』第二卷。
- (23) 後世の鎮墓獸には羽のはえたものも多い。

- (24) 碓井益雄『靈魂の博物誌』、河出書房新社、一九八二年、八五頁「鳥と靈魂」参照。
- (25) 熊は方相氏と関連する。
- (26) 前掲『中国銅鏡図典』九七頁、禽獸鏡など。
- (27) 鏡に対する図録は数多いが、ここでは前掲『中国銅鏡図典』をもとに考察した。以下の前漢・新・後漢の表は禽獸鏡を網羅しようとするものではない。大まかな傾向を把握するための表である。なお番号は『中国銅鏡図典』に付せられたものである。
- (28) 『和泉市久保惣記念美術館藏鏡拓影』、一九八四年、図版一八。後出、「新」の表参照。
- (29) 『新編秦漢瓦当図録』陝西省考古研究所秦漢研究室編、三秦出版社、一九八六年。三一頁、鳳翔県豆腐村遺址採集。
- (30) 前掲『新編秦漢瓦当図録』。
- (31) 成紀は甘肅省の県名。
- (32) 曾布川寛『麒麟と四霊』（江上波夫監修『聖獸伝説』、講談社、一九八八年）六四～六七頁。
- (33) 『春秋』哀公二四年「西狩獲麟」。杜預注に「麟者仁獸、聖王之嘉瑞也」等。
- (34) 前掲、漢・四乳禽獸鏡二六八。
- (35) この五行は相生・相克といった循環する五行ではない。
- (36) 前掲『中国古代の肖形印』一一三頁。
- (37) 同右二〇九頁。
- (38) 『沂南古画像石墓発掘報告』南京博物、一九五六年、図版一八一。
- (39) 林巳奈夫『龍の話』、中公新書、一九九三年、図九四「天の中央の星座の蓮の花（一～二世紀）」京大人文研考古資料。
- (40) 前掲『新編秦漢瓦当図録』三五頁、秦、蓮華紋瓦当。
- (41) 林巳奈夫『漢鏡の図柄二、三について』（『東方学報』京都第四四冊、一九七三年）に「四神図」についての考察がある。おもに星座とのかかわりを説き、本稿とは視点が異なる。
- (42) 鏡銘に多い。「日月之明（日光博局蟠螭鏡、『中国銅鏡図典』一七〇）」「光而象夫日月（昭明連弧銘帶鏡、『中国銅鏡図典』二三〇）」等。
- (43) 前掲『中国銅鏡図典』の記述にしたがったが、個々の禽獸については検討が必要。
- (44) 漢、尚方七乳四神鏡、前掲『中国銅鏡図典』三四七頁。なお鏡と瑞祥の関係については、林巳奈夫「（統）漢鏡の図柄二、三について」（『東方学報』京都第五〇冊、一九七八年）七〇頁に指摘があり、同注二六では鏡銘の具体例が多数挙げられている。
- (45) 『論語』子罕篇に「鳳鳥不至、河不出図、吾已矣夫」。其の

注に「孔曰、聖人受命、則鳳鳥至、河出圖。今天無此瑞」。

(47) 前掲『新編秦漢瓦当図録』二六頁等。

(48) 『河南新鄭画像磚』、上海書画出版社、一九九三年、一一〇頁の朱雀の説明文参照。鳳凰については出石誠彦『鳳凰の由来について』、『支那神話伝説の研究』中央公論社、一九四三年がある。

(49) 『詩経』召南騶虞の伝。

(50) 『公羊伝』哀公二四年。

(51) 孔雀は『漢書』南粵王趙佗伝・『說苑』雜言・『列仙伝』蕭史などにみえる。孔雀の雀と朱雀の雀の関係については不明。

(52) 「四神の一、朱鳥について」、『史林』七七・六、京都大学文学部内史学研究会、一九九四年、参照。

(53) 前掲『中国銅鏡図典』三六二頁。

(54) ここでは詳しくふれないが、蛇をあやつる禺疆がいる。『山海経』海外北経に「北方禺疆、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩青蛇、字玄冥、水神也…」とみえる。他に禺強（『莊子』大宗師）、禺疆（『山海経』大荒北経・『列子』湯問）、禺猼（『山海経』大荒東経）、禺京（『山海経』大荒東経）などが蛇や水と関わり、玄冥などと北方の玄と関連づけられている。玄武の命名と関わるだろう。玄武については、「蛇と靈魂の関係」と題して

詳しく考察する予定。

(55) 前掲『伏魔蔵印』八〇頁。

(56) 五味充子、「四神」、『世界考古学事典』上、平凡社、一九七九年。長廣敏雄『漢代画家の研究』、京大人文科学研究所、中央公論美術出版社、一九六五年。長廣敏雄『六朝時代美術の研究』、東京美術出版社、一九六九年、参照。

(57) 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』、一九八五年。有光教一「四神塚」、『図解考古学辞典』、創元社、一九五九年。有光教一「朝鮮の四神塚古墳」、末永雅雄編『飛鳥高松塚古墳』所収、学生社、一九七二年、六〇～六四頁。有光教一「古代の日本と韓国」、学生社、一九九〇年。『有光教一著作集2、朝鮮文化の黎明』、同朋社、一九九二年、参照。

※本稿は一九九五年五月一日、近つ飛鳥博物館での講演「鏡にうつる神仙思想」および一九九六年一月二六日に台湾、高雄市、佛光山で行われた第一回、宗教文化国際学術会議の発表「四神考」をふまえる。なお同会議では、本稿の元原稿が資料集として簡易製本されて配布されている。

（おおがた とおる・中国思想助教授）